慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想論上のカーライルとミル
Sub Title	
Author	谷口, 彌五郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.6 (1923. 6) ,p.899(77)- 915(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230601-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最古の歴史を有し
最新の化學に成れる！
金線サイダー

東京、横濱
金線飲料株式會社

雜錄

社會思想論上のカーライルとミル

谷口彌五郎

一

十九世紀の中葉二人の偉大なる思想家が殆んど時を同じうして英國に現はれ、而かも枘鑿相容れざるの論據を持して當時の思想界に至大なる影響を與へた。其一人は「英雄崇拜論」その他に依つて古くから、我が讀書子の間に知られて居るトーマス・カーライルであり、今一人は正統經濟學派の巨擘ジョン・スチュアート・ミルであつた。

カーライルを生みミルを出した十九世紀中葉の英國、それはナポレオン戰後の影響を受けて國內的にも國外的にも所謂多事多難の時代であつた。則ち國外に於ては廣大なる植民地を得て商品の需要は激增し、國內に於ては生產革命に依つて其需要に應ずるだけの供給力は備はり、產業の隆昌と貿易の伸張とは相俟つて頓みに國富の膨大を來たした。乍併國富の增進は必ずしも一般國民の福利を持ち來たさなかつたのであつて、當時英國は國家としては急速な繁榮を遂げたに拘らず、一度び其內部を覗へば其處には地主階級と資本家階級との間に政治上の軋轢があり、資本家階級と勞働者階級との間にもそれに遜らぬ反噬が釀されつゝあつた。前者の軋轢は一八三二年のリフォーム・ビルに依つて一段落を告げたが、リフォーム・ビルの通過に資本家階級を助けた勞働者階級は、彼等がそれに依つて何等益する所のなかつたのを知つて再び改

革運動を起し、凡そ十五年の間宣傳や示威運動など諸種の險惡な運動が繰返くされた。のみならず此運動と相前後して穀物法撤廢運動幷に工場法實施運動が加はり、十九世紀前半の英國は上下を擧げて所謂物情騷然たる狀態であつた。カーライルとミルとは實にかゝる時代を背景として現はれたのである。

カーライルにせよミルにせよ、今日の我々からは既に一世紀を遠ざかつて居る。乍併彼等の論じた所は當時の社會に必要であつたと同時に、今日の社會に於ても尙ほ依然として必要であると見なければならぬ。殊に彼等の持つたところの誠實と眞劍とは、今日と雖も深く我々の學ぶべき所であると思ふ。此意味に於て私は、茲で彼等の所論を紹介すると同時に卑見を述べ、多少とも今日の參考に供し度いと此小論を試みんとするのである。

二

カーライルは、文藝評論家乃至社會思想家としてよりも寧ろ歷史家として傳へられ、實際また歷史上の著述が多かつた。併乍彼がそれ等數多くの名篇力作と共に遺したところの「過去と現在」及び「チャーチズム」の二篇は、更に社會思想家としての彼の卓越を示すに充分であつた。今私は主として此二篇に依つて彼の社會思想を尋ね、順序として先づ當時の社會に對する彼の所懷を披いて見やうと思ふのである。

カーライルは當時の社會を以て、宗敎もなく、神もなく、人々は其靈魂を失つて空しく防腐の鹽を、求めてゐる腐爛の世であると觀た。即ち「神の掟は最大幸福の原理や議會の便宜主義と成り果て、上天はたゞ天文學上の時計として：：：：：我等の頭上に圓天井を擴げてゐるに過ぎない。最早や國王の殺戮でも、選擧法の改革

案でも、佛蘭西革命でも、マンチエスターの暴動でも、到底救はるべき世の中ではない」とかう彼は考へたのであつた。

かるが故に彼は云つた。「見よ、今や英國は富に滿ち、千種萬別の生產物に滿ち、人類の要求に應ずべきあらゆる供給に滿ちて居るに拘らず、而かも英國は營養過少のために死に瀕してゐるではないか。黃熟せる收穫は野に波打ち、工場や產業器械や無比の强健と巧妙と歡喜とを持つ千五百萬の勞働者は充ち溢れ、英國の國土は減ずることなき豐饒に花咲き成長して居るにも拘らず、總べてを征服する勇敢なる勞働の子は幾百萬となく貧民救助法の牢獄に茫然と座して居るではないか。而かも英國民は、かゝる狀態を恰かも自然法であるかの如く冷眼視し、自由放任や需要供給や現金支拂が人間を結び付ける唯一の紐帶であるかの樣に空漠たる論議を嘯いてゐるのである。寔に其處には勞働の神もなく、神々しい勞働と拜金主義とが同義語であるかの如き有樣である。眞面目な最も熱心な拜金主義はマイダスの隸奴となり、不眞面目不熱心な好事主義者は得體の知れぬ饒舌を弄んで居る。世界勞働者であり：：：：：永遠の造物者である神の眞正表象たる勞働の巨人、嚮ては地上の王となり最高の玉座につくべき高貴なる勞働、それが今日まで盲目な不合理な巨人の樣によろめき、街頭で人並の道を步むことさへ許されて居ないのである。：：：：」

斯う論じ來つたカーライルは英國政府の態度を非難して「一體一國の支配者たる者は如何なる壓制の國にあつても支配者たると同時に國民の忠實な下僕でなければならぬのであるが、今日の英國には天の前兆を信じて：：：：英國人の偉大なる心に雄々しく身を獻じ得る樣な首相は

居ない」と嘆じ、更に軍隊の繁榮を指して「舊制度は既に生命を失ふて空しき裝飾となり新制度は生れんとして生れざる今日。あらゆる貧苦と嘆息とに滿ちて居る今日、……威壓する樣な正裝を凝らし逞しい漆黑の馬に跨り悠々として去來する近衛騎兵は、一種の感慨なくして見る能はざるものである」と冷笑して居るのである。

當時の社會を斯樣に觀じた彼にとつて、其處に如何に多くの英蘭銀行があり紡績工場があり公爵の邸宅があらうとも、國民の行く手は無言の勇氣に依つて贏ち得らるべき極樂淨土や勝利の永遠の冠ではなく、唯懸崖と深淵があるのみである」と斷言したことは、多少理想主義的舊奮はあつたにしても恐らく彼當然の歸結であつたらうと思はれる。

三

貧賤な一石工の子として生れたカーライルは、常に熱烈な勞働の讃美者であり深き同情者であつた。

彼に從へば、勞働の中には盡さることなき氣高さと神聖ささへも含まれて居るのであつて、實際に且つ熱心に勞働する人は假令一時暗黑に包まれ高き使命を忘れることがあらうとも、其前途には常に希望があり光明がある。勞働はどれ程拜金的で卑賤であらうとも、それは自然と交通して居る。夫故に人間は働くことに依つて自己を完成させることが出來る　勞働の前には荊棘は拓かれて美はしい田野となり又壯麗な都市となると共に、人間そのものも亦初めて荊棘たゝ曠野たることから免れるのである。如何に劣等の勞働と雖も一度人間がそれに着手すれば、其全體魂は直ちに一種眞正な諧調を得し、疑惑悲哀悔恨憤怒絶望はその跡を絕つ。即ち人は此處で初めて眞の人間となるのである。

乍併かゝる神聖なる勞働も、拜金主義の惡魔に魅せられては往々にして其眞正なる意義を覆はれる。勞働は由來宗教的のもので、宗教のない勞働は唯人目を飾ることや强欲に賃銀を貪ることのために爲さるゝに過ぎない。財寶の奴隷となつて合理的靈魂の目覺めない產業勞働、それは寔に悲慘なる光景である。乍併未だ落膽するには及ばない。勞働は假令拜金主義に覆はれて居ようとも決して惡魔ではなく、意識的無意識的に常に拜金主義から逃れようと蹠いて居る拘禁せられたるの神である。

さればカーライルは勞働者に告げて云つた。

「君等勞働する人々よ、君等は既に仕事をしてゐる氣高い尊敬すべき成人である。全世界は君等に向つて新しい仕事と氣高さとを求めて居る。雄々しさと正義と慈悲と賢明とを以て、反逆と軋轢と彌漫せる絕望とを征服せよ。渾沌は地獄の如く暗く深い。併乍其處に光あらしめよ、然らば其處に花咲く綠の世界は生れるであらう。それは偉大なる事業である。それに優る偉大な事業はないのである。」と。

勞働を斯くまで尊重し讃美したカーライルにとつて、當時に於ける勞働階級の現實は目も當てられぬ悲慘の極であつた。彼の記すところに據ると、當時英國民の幾十萬人は貧民救護所に座し、他の幾十萬人は貧民救護所すら得てゐなかつた。節儉な蘇格蘭でさへ、グラスゴーやエディンバラの暗い路次には災禍と貧窮と荒廢とが充滿せる狀態であつた。ストックポートの巡回裁判では、或る母親と父親が三人の子を毒殺した廉で有罪の判決を受けたが、之は子供一人の死に對して受ける約三磅八志の金を埋葬協會から詐取しやうとしたゝめであつた。人間の父

であり母である者が飢餓に瀕してゐる子供の苦痛を救ひ、またそれに依つて殘る人々の生命を繋ぐため、最愛の子供を三人まで毒殺するといふ、何といふ悲慘事であらう。而かもかゝる實例は僅かに視野に現はれた山嶺のやうなもので、その下には現はれざる多くの山野が横はつてゐたのである。

故に彼は云つた。「グラスゴーの暗殺團にしても、バーミンガムの暴動にしても、またスイングの大火にしても、何れもかゝる社會的不安の發露と見るべきものである。」「然るに英國の政治家や上流階級の人々は、一向眞面目な考慮を拂つてゐない。此事實は下層民の不幸たると同時に、また上流民そのものゝ禍根である。上流民が今後なほ其怠慢と横暴とを續けるならば、彼等は第二第三の佛蘭西革命を覺悟しなければならぬ。」「さればこの際上流階級の火急に勵むべきことは、下流階級の眞に要求せるものを諒解し速やかに適切な對策を講ずべきことである。」……と。

カーライルは斯く論じ來たつて當時の諸政策を批判し、上流階級の反省を促して、徐々に彼の理想主義的社會思想を展開したのであつた。

四

先づカーライルは穀物法撤廢運動にも工場法にも又チャーチスト運動にも餘り大なる希望を持たなかつた。蓋し穀物法を撤廢した所で十年二十年はよいにしても永久に勞働者の生活を保證し得るものではなく、其十年なり二十年なりの間に更に新しい手段が發見されぬ限り最早や第二の猶豫は與へられないからである。

工場法と雖も同じことで、勞働者の狀態に無知であり其眞の要求を理解しない立法府の法律が正當である筈はなく、また良好な結果を齎らす譯もないのである。

チャーチスト運動も亦カーライルの希望を繋ぐに足りなかつた。即ち彼はデモクラシーを以て「支配者たる英雄を發見するに絶望して、その缺乏に甘んずることである」と見做し、人間の自由が國家の小田原評議に一人の辯士を送ることの二萬分の一の權利を意味するものだと云ふ樣な考へは滑稽至極であると云つた。彼に從へば、かゝる自由は人々が如何に稱揚しやうとも長く地球の耐え得るものではなく、幾百萬の勞働者にとつては驅て餓死することの自由となり、怠惰なる幾千人にとつては仕事なしに生活せねばならぬ自由となることを疑ひないのである。

彼の考へるところでは、英國當時の社會的不安は右の如き諸政策に依つて一掃されるには、その據つて來るところもつと深く廣い。現代社會の根本的禍根ともいふべきものは、今日我等の生活が相互扶助でなくして自由競爭なる美名の下に互に敵對してゐることである。今日の人々は、現金の授受が人間を連結する唯一の物でないといふことを忘れ、それが人間の契約を解除し清算する絶對のものだと考へて居る。故に今日の對人關係は全く機械化され現金化されて、其處にはたゞ殺伐と憂鬱とがあるのみである。かゝる狀態は一片の法律や決議でもつて改良され得るものではない。

そこでカーライルは云つた。

「此狀態を救ふには先づ第一に社會の指導者たる上流階級を改善することが必要である。封建時代の治者は內に人間の靈魂を持ち、その周圍に彼等を心から愛護する人々を持つことの尊さを感じて居た。彼等は周圍の人々の生命を恩威を以て監視し、また周圍の人々も一朝事あれ

ば其生命を抛つ覺悟を持つてゐたのである。それは美しく、實に人間らしいものであつた。然るに今日の治者階級はどうであらう。工場貴族は徒らにマンモンの奴隷となり、土地貴族は遊獵を事として肉的歡樂に浮身を窶してゐる。今日彼等の間に見るところの傲慢無力な實行上の無爲と言論上の沈默とは驚くべきものである。一穀物法が、動物をさへ涙させる馬鹿げた議論を以て、十年以上も公々然と辯護されたではないか。彼等は人間の舌が神聖な器關であることも、人間自身が哲學上理性の權化と定義されてゐることも、人間に理性がなければ唯幻影に過ぎないといふことも全く知らない有樣である。彼等をして榮華を誇らしめる土地は一體何であらう。それは耕したると耕さざるとを問はず、總べて神の賜物なのである。近來この英國の土地は誰が作つたかといふ問題が喧しく叫ばれ、怠慢な貴族達は之を作つたものは我々だ、縱令さうでないにしても我々はそれを作つた者の相續者兼代表者である、と答へて居るが、余は敢て云ふ、諸君等は決して此土地を作つたのではないと。土地貴族がそれを所有するためには、英國に指導と統治とを與へる義務を負はねばならぬ。無統治や自由放任や況んや誤れる統治や穀物法ではなくして、眞の統治者たり指導者たるの覺悟が必要である。工場貴族も亦速やかに新しい途に進み、金錢のみが此世に於ける人間の成功の代表物でも人間の人間に對する義務でもないことを了解しなければならぬ。現在の經濟組織は全く無政府無統治の狀態であるが、斯樣の狀態は決して永續すべきものではなく、勞働者は必ず適當な指導者の下に組織せられて永遠的の安定を得なければならぬのである。而して其指導者たり組織者たるものは即ちこの工場貴族でなければならぬのであつて、工場貴族たるものは勞働軍を自己の忠實なる部下とし、一時的日給とは別な深い關係に依つて、即ち眞の兄弟眞の親子として彼等を自分に結び付けねばならぬのである。」

カーライルは斯樣に說き來たつて「自由の名は如何に美しくとも、そのために此世の旅が死と破滅とに終るならば、寧ろ奴隷と呼ばれ卑怯者と呼ばれようとも生に到達する方が幸福である」と述べ、次の言葉を以てその所論を結んだのであつた。

「反抗と窮乏と困亂との中にある勞働者、滅亡と狂亂とに瀕せる勞働者、彼等を救ふものは六片の日給でもなく需要供給の原則でもない。工場貴族は起つて彼等惱める勞働者に正しき指導を與へ、彼等勞働者をして正しき隷屬に服せしめねばならぬ。勞働者は氣高き指導に對する奉仕として氣高き忠節を盡さねばならぬ。それが今日の渾沌を救ふべき唯一の道である」と。

五

以上述べた如く、カーライルの社會思想は一種の貴族的理想主義であつた。それ故に彼は、政治論に於ては賢良政治を信じて愚人の永久的特權は賢人のために支配さるゝことであると云ひ、倫理觀に於ては最大多數の最大幸福說を排して欲望の抑制を理想とし、更に勞働問題に於ては所謂溫情主義を主張して工場貴族の永遠的存在と其指導能力とを信じたのであつた。

彼の說いたところは實際政策としては可成り空漠であり、また文飾的たるを免れなかつた。乍併それと同時に彼の描き上げた善美なる理想の殿堂には、少くとも「最も高貴な目的」を藏してゐたことを認めなければならぬ。彼は貴族の指導的地位を認めたが、美衣美食を事とし空

虚な社會的地位を無上の誇とするような貴族は、之を貴族の形骸なりと罵り、眞の貴族は社會的上層階級たるの職分を自覺し、私利私欲を捨てゝ一般人類の寧福を圖り、人類に潜在する必然の趨向を洞察して、一般人類をその向ふべき正道に進ましむる努力者でなければならぬ、と主張したのであつた。從つて彼の溫情政策は、勞働貴族が眞率な血族的人情を以て勞働者を待遇し、勞働者はそれに從つて生活の改善を圖らねばならぬと主張したのであつて、看板政策足止政策としての溫情主義の如き彼の思ひも寄らぬ所であつた。乍併如何に思ひも寄らぬところであつたにせよ、彼の所說は矢張り看板政策足止政策に利用さるゝの危險を多分に持つて居つた。それに言及しなかつたことは彼が餘りに貴族を過信した結果によるもので、茲に彼の美點があつたと同時に又其缺點が認はれると思ふ。

「永遠に非難すべからざる唯一の祈禱は勞働である」とさへ云つた彼が、何故に民衆を悲觀し、また勞働者能力の發達を信じなかつたのであらうか。何故に貴族のみを永遠の指導者なりと認めたのであらうか。或る社會學者の云つた樣に、總べての人間は縱令萬物の靈長であらうとも、また時として自らを神へ或は獸と考へることがあらうとも、全體としての人間は神性と獸性とを共有する生物に外ならぬのである。されば貴族を神性の所有者だと見るならば、勞働者をも亦同樣に見なければならぬ。單に彼を高くして此を卑くする理由はあり得ないと思はれるのである。

幸か不幸か彼の主張した政治論も勞働論も將た倫理論も、遂ゐに後世の現實を左右するに至らなかつた。現實の進行は、寧しろ彼の思想と正反對に進んだとさへ云ふことが出來る。乍併それにも拘らず彼の說いたところには、我々人類の恐らく永遠に捨て得ないであらう所の教理を含んで居た。彼の思想を一貫せる苦行の福音、例へば「人間の生涯は五溯節の遊戯ではなく、それは戰鬪であり行軍である。それは合唱するミューズの神や薔薇色のアワーズの神に侍づかれて、匂高きオレンヂの森や花咲く綠の野邊を行く無爲の徜徉ではなく、燒くが如き沙漠と頑强な氷原を行く苦難の逼路である」と云つたような苦痛の哲學は、私達にとつて常に新しい勇氣であり又慰藉であると思ふ。唯この苦痛忍從の哲學が悲慘なる勞働者への教訓となつて現はれた時、それは寧ろ勞働にとつての「諦の哲學」となり果てることは餘りに明白であつた。此意味に於て私達は、カーライルの思想は勞働者階級に寄與したよりも、貴族階級に對する警告としてのみ有意義であつたと考へるのである。

由來理想主義的立場と現實主義的立場とは、各個人の中に併存するように各時代の中に對立するものである。而して何れの時代にあつても、被壓迫階級に必要なのは前者の立場よりも寧しろ後者の立場にあるのであつて、治者階級は理想主義的立場をとることに依つて巧みに自己の特權的地位を擁護することが出來るが、被治者階級はそれをとることに依つて徒らに自慰若くは現實廻避に陷るに過ぎないのである。されば苦悶せる民衆の勃興せんとする時代、その民衆に勇氣を與へ、その要求に正常の方向を與へるものは、理想主義的立場に非ずして現實的立場でなければならぬと思ふ。而して今カーライルの時代、彼の理想主義に對して現實的立場をとつた思想家をもとめるならば、ジョン・スチュアート・ミルこそ卓越せるその代表者であつたのである。

六

先づ第一にミルは、カーライルの保護干渉主義に對して自由主義の讃美者信仰者であつた彼に從へば、人間の行爲の中社會に對して責任あるものは、他人に關係ある行爲それのみである。單に自己一身上に關するものは自主自由が正當であり絶對なのであつて、個人は自己の身心に對しては絶對の主權者でなければならぬのである。

即ち彼は云ふ

「人類の未だ發達しない時代に於ては、人々は英雄偉人の言に服從する外方法がなかつたかも知れない。乍併今日のように既に各人その信念に依つて自己を改善し得る時代に於ては、强制は彼等に何等の福利を與へるものではない。總べての人は、自分自身の肉體的乃至精神的健全の當然の守護者である。他人に善と見えることを各人に强ふるよりも、寧しろ各人が自分の善と見る所に從つて生活する方が人類の幸福である。」

斯くの如く自由の原則を說いた彼の言葉は、更に思想言論の自由、行爲の自由を論じて云ふ

「人民は、人民自らにせよ又その政府にせよ、思想言論を壓迫すべき權利を持たない。權力そのものが不正なのである。唯一人を除く他の總べてが同說であらうとも、此人類全體でその一人を緘默せしめることは、その一人が權力を以て人類全體を緘默せしめると同樣の不當である。」

「怖るべき禍害は、眞理の部分間に於ける激しい軋轢ではなくして、その半ばを壓迫せしめることである。人々が所說の兩端を聞けばそこに常に希望の存するものであるが、一端のみを聞けば誤謬は凝結して偏見となり、眞理そのものも誇張せられたる虛僞となり、結局眞理の效果を失ふに至るものである。」

「人々は自己の意見に基づいて自由に行動しなければならぬ。即ち他人に危害を及ぼさゞる限り、有形無形を問はず其同胞の防碍を受くることなく、自己の所說を其生活に自由に實行しなければならぬ。」

「人類向上の本源はたゞ自由あるのみである。……個人の自由を破る政治は、如何なる名目に依つて行はれようとも、そは專制政治である……。」

七

以上ミルの自由觀に從へば、勞働問題に對する彼の所說の寧しろカーライルに正反對であつたことが容易に想像される。その著「經濟原論」中の一章「勞働者の將來」は、實にカーライル流の保護從屬主義の駁論に初まるのである。

即ち謂ふ

「保護從屬說に從へば、富者と貧者との關係は全然權利義務の關係ではなくて、溫情的道德的感情的でなければならぬ、即ち富者は愛撫的保護を以て貧民に對し、貧民は尊敬と感謝とを以て之に服從する關係でなければならぬ、貧民等は唯道德を守り宗敎を信じて日々の仕事に從事すればよいのであつて、それ以外自ら何事をなす必要もないといふことに歸着するのであるが、かゝる理想は歷史上未だ曾つて實現されたことのない理想である。總べての特權階級は、其權力を自己の利益のために使用するに過ぎない。彼等は、彼等の利益になる樣に働かざるを得ないために墮落した人々に對して少しも親切な注意を拂ふことなく、徒らに之を輕蔑してその自尊心を恣にしてゐるのである。勿論余は從來が常に斯樣の有樣であつたから將來も亦非常

にさうでなければならぬと主張するのではなく、また人間の改良が權力の生む强烈な利己感情を匡正するに足らないと主張するのでもない。唯權力そのものゝ取り去られない限り、縱令弊害が輕減されることがあらうとも決して根絶はされないと考へるのである。少くとも、上流階級が充分改善せられて下層階級を支配し其保護者となり得る以前に於て、下層階級は最早や斯くの如き支配に甘んじない程、改善されて了ふに相違ないと信ずるのである。保護從屬說の描ける社會は、寔に美しい社會である。金錢關係で結び付けられた社會よりも、人間的感情や自己犧牲の精神に滿ちた社會は望ましいものに相違ない。乍併少くとも進步した歐洲諸國の勞働者が、今後再び家長的乃至父權的統治組織に服從しないことは明らかである。既に彼等が讀むことを敎へられ、新聞が發行され、新思想の宣傳が行はれ、交通機關が布及せられ、選擧權が擴張された時、問題は既に決したのである。彼等勞働者は、雇主の利害と彼等自身の利害とが寧しろ正反對であることを考へるに至つたのである。上流階級の或る者は、道德的宗敎的敎育に依つて之等の傾向を防ぎ得ると自惚れては居るが、併し彼等の目的に役立つような敎育を施す時代は既に過ぎ去つたのである」と。

八

ミルの勞働政策はこの保護從屬說の駁論中に自ら胚胎するのであつて、彼は語を繼いで云ふよう

「今後に於ける勞働者の幸福及び善行は、上に述べたものとは全然違つた基礎の上に置かれねばならぬ。貧民は既に指導者を要せず、最早や之を子供の樣に支配し取扱ふことの出來ない狀態となつた。彼等自身の運命を開拓することは、今日では彼等自身の力に一任せねばならぬことゝなつた。獨立の德――それは今日の勞働者に缺くべからざるものである。忠告にせよ、訓戒にせよ、或はまた指導にせよ、之を勞働者階級に與へんとする場合には、今後我等は彼等を對等の人間として取扱ひ、彼等をして彼等自らの眼を開いて之を取捨する樣にしなければならぬ。勞働者の斯の如き能力は、今後廣い意味の敎育に依つて達せらるゝこと、思ふが、此知識增進の結果から五六の現象を豫測出來る。即ち先づ第一に、彼等は上流階級の單なる權威及び威信に依つて指導され支配され彼等の行くべき道を指圖されることを益々嫌惡するに至り、彼等の行動及び條件は本質的に自治に依るべきものなることを要求するに至るであらう。また勞働者達は、勞賃を得て勞働するといふ狀態が彼等の滿足すべき窮極の狀態でないことを考へるに至るであらう。思ふに今日の勞資關係は、勞賃の支拂主にとつても又その受領者にとつても、同樣に不滿足なものに相違ない。若し富者が貧民を目して一種の自然法に依て彼の隷奴たり彼の從者たるものだと見做すならば、今度は反對に貧民から、自分達の餌食たり牧場たるに過ぎないと見做されるであらう。斯くて今日は良い賃銀を貰つて良い仕事をしやうとする者はなく、大部分の勞働者は出來るだけ多くの賃銀を得て出來るだけ少ない勤勞を與へようとしてゐるのである。恐らく資本家にとつても、その利害及び感情を異にする人々と密接に生活することは、早晩耐え得ないことゝなるであらう。

茲に於て勞働者は保護從屬の關係を離れて自立獨立の地位を得、自らの利益のために喜んで働くことにならねばならぬのである。然らばその方法如何といふに、それは資本と勞働とを協

同せしむる勞働者生産組合幷に勞働者をして事業の利潤及び經營に參加せしめるところの諸制度である。之等の制度の下にあつては、勞働者は共同利益のために働くのであるから、其生産能率を增大すること云ふまでもなく、また勞働者の組合事業と資本家の個人企業と對立の結果、後者は低級な勞働者しか得られないため次第に衰微し、結局その資本を勞働者生産組合に託して運轉するの餘儀なきに至るであらう。斯の如くにして將來の社會は、勞働者生産組合の發達に依つて一變せられ、勞働者の獨立が完全に贏ち得られることになるであらう」と。

九

ミルの描ける未來社會は大樣右の如きものであつた。即ちカーライルの思想とは殆んど對蹠的のものであつた。保護從屬の關係に依つて勞資を協調せしめることは、或る一部の工場若しくは進歩程度の低い國では出來るかも知れぬが、社會教育の普及せる今日の社會に於ては到底望み得べきことではない、今日の勞資關係は全然組織を更めてその上で改造されねばならぬ……之がミルの根本主張で、其結果として彼は勞働者生産組合に到達した次第である。

乍併ミル以後の大勢は、必ずしも彼の豫言通りには進まなかつた。幾多の勞働者生産組合は計畫もされ實現もされたが、その殆んど大部分は失敗に終つた。その失敗の主要原因が勞働者自治能力の缺乏にあつた點を見れば、寧ろカーライルの豫言を裏書きしたものとさへ思はれるのである。乍去縱令右の事實があつたにせよ、それを以て直ちに「勞働者自治能力の缺乏は恒久の事實」であると斷ずるのは早計であらう。マーシャル教授の云つた樣に勞働階級の子弟に優秀者の少ないことは事實かも知れないが、勞働者生活の現狀を度外視して自治能力の未發達のみを云ふことは出來ない。それ故に私は思ふ、ミルの豫言は縱令的中しなかつたとしても、それは永遠の誤算ではなかつた、と。彼の根本思想であつた自主獨立の精神は、カーライルの保護從屬主義に反比例して年と共に勞働者階級の最も强根い要求となり、今日のセンデイカリズムにせよギルドソシアリズムにせよ、或意味に於ては深化變形されたところのミルの希望であると云ひ得るのである。

多種多端の束縛羈絆が重き鐵鎖として今日吾人の手足を掣肘してゐるならば、自主自由への努力はまた當然に我等の捨て得ない努力であらう。而して自由への努力が、政治的自由の獲得と共に經濟的自由の獲得でなければならないことは、今日殆んど總べての思想家の一致するところである。然らば此經濟的自由は如何にして獲得すべきものであるか――こは實に一世紀の昔に於て既にミルの提出した疑問なのであつて勞働者生産組合は即ちそれに對する彼の答辯だつたのである。

論じて茲に至れば縱令勞働者生産組合が失敗の歷史を重ねたにしても、それを以て直ちに單なる空想の破滅であると笑殺は出來ない。幾度び失敗地に塗みれようとも、ミルの手は理想の天國のみになく、其足は固く地上に踏みつけられて居た。彼の豫言は的中しなかつたとしても、その云つたところは依然として今日我々の問題として殘されて居るのである。

Carlyle; Past and Present.
Carlyle; Miscellaneous Essays.
J. S. Mill; On Liberty.
J. S. Mill; Principle of P. E.
長谷川萬次郎「現在社會批判」
上田貞次郎「企業と社會改造」